

芭蕉元祿事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十八年二月度 入選句（投稿総数一九九一句・一般投句数五三三句）

特選 選者 名和 永山

背ナさする手の温もりや卵粥 大垣市 松岡 みつ

病に伏せつてゐる作者に、背中をさすってくれる人がいる。その手のぬくもりを感じたのである。そして「手の温もりや」と「や」の切れ字を用い、さらに身も心も暖めてくれる「卵粥」と下五に置いたことにより、手のぬくもりと同様に「粥」もまた、嬉しいことであつたと強調しているのである。季語は「温もり」（ぬくし）で春。「粥」は、「七草粥」や「粥柱」は季語になるが、この場合の「粥」は、食へ物となる。また表記のしかたで「背ナ」としている工夫も見られる。俳句は「韻」を大切にするので、「背（せ）をさする」より「背ナさする」方がリズムも歯切れも良くなる。「背（せ）ではなく「背（せな」と読んでもらいたいときには、こうした表記がなされる、「一日」（いちにち）とも読むが、「一ト日」（ひとひ）なども同様である。

伊勢海老の髭のはみ出し祝膳 養老郡養老町 田中 秀子

季語は「伊勢海老」で新年。大変立派な伊勢海老が見えてくる。皿に載せられた伊勢海老の髭がはみ出していることでもわかるが、作者は、伊勢海老の大きさだけを詠ったのではないだろう。伊勢海老の大きさは、また作者の祝いに対する喜びの大きさであるのではないかと考えたが、いかがであろうか。俳句は「季語にものを言わせる」のであるから、喜びの大きさも「伊勢海老の大きさ」につながっているのである。

やはらかし山水掬ひ初茜 大垣市 三輪 千芽

季語は「初茜」で新年。新年の朝の茜色に染まった空である。作者は、山水を手ですくえるところに在る。そして「初茜」に新しい年の訪れに心を動かされたのであろう。柔らかな水と空模様であるがゆえに、新たな年をどのようか、つまり、柔らかいものを新たにどのようか、つなげていこうかという信念のようなものを感じることが出来る。

秀逸

幸せは高きにあらず福寿草 養老郡養老町 田中 紫香

幾重にも絵馬の掛かりて初御空 福井県敦賀市 山田 美千代

百年の鯉冬光をひと飲みす 大垣市 酒井 安彦

湯婆に湯そそぎて慣れり一人床 海津市 横井 美圭

重詰めも客も片付き風の空 大垣市 小林 千代

氷柱肥ゆ山の難事の長引いて 岐阜市 堀江 美州

初髪を崩し明日よりナース帽 愛知県額田郡 平松 京師

人日や診察券の溢れたり 大垣市 傍島 豊子

春泥や真新し靴土まだら 大垣市 在間 瑠子

入選

老いてなほ興味津々返り花
 弓絞る間合に満つる淑気かな
 下仁田の葱の太さや日の急ける
 いろいろな形の不幸虎落笛
 初電話話独居の友の長話
 初鶏や味噌とく箸が止まりけり
 退院の車窓より入る冬夕焼
 庇髪ふれ住吉の寒桜
 初暦かけて病室はなやげり
 梅の香や受話器の余韻そつと置く

愛知県弥富市 佐藤 尚美
 養老郡養老町 田中 紫香
 岐阜市 富永 萬里
 大垣市 宮上 美濃留
 大垣市 佐竹 余史美
 大垣市 岩田 唯志
 大垣市 平野 きぬよ
 三重県桑名市 森 美音
 不破郡垂井町 中嶋 笑子
 東京都世田谷区 関戸 信治

入選

節分の男氣勢の川渡る
 裂帛の面へ一激寒稽古
 福豆に追はれ宿無し鬼は外
 ゆたかなる堰の水音花こぶし
 七草の名はとぎれがち粥仕上ぐ
 夕陽さす障子の透ける奥座敷
 美容師の細き指先冬すみれ
 春立つやふいにスキップしたくなり
 散る時も色を重ねて冬もみぢ
 重詰の一角に盛る己が幸

大垣市 川瀬 喜梅古
 大垣市 伊藤 有紀
 大垣市 多和田 一徳
 安八郡神戸町 澤崎 和子
 不破郡垂井町 清水 るり
 大垣市 松岡 みつ
 岐阜市 小湊 順子
 福井県敦賀市 山田 美千代
 大垣市 片山 洋紅
 岐阜市 堀江 美州

選者吟

踏まば罪踏まねば罪の踏絵かな

永山